



まえかわ・よういちろう
昭和19年、大阪府生まれ。神戸大経営学部卒。42年、松下電器産業（現パナソニック）入社。録音機、ハイファイオーディオなどの開発に携わる。取締役、役員、顧問を経て平成18年に同社終身客員。在職中の17年、高知工科大学大学院工科学研究科博士課程修了。19年、関西外国語大教授。20年、大阪商業大大学院特別教授。非常勤講師を務める流通科学大で4月から「老舗学」講座が始まった。



カラオケが誕生して約40年。国民の生活に定着するまでには、多くのメーカーで技術開発の競争が繰り広げられた。その中で昭和50年代に家庭用カラオケ第1号の開発に携わったのが、前川洋一郎・関西外国語大教授(65)。このほど、業界の歴史や将来の可能性を網羅した『カラオケ進化論』（廣済堂出版）を出版した。カラオケ博士の鋭い舌鋒は、企業から関西財界、大学まで広がった。

（聞き手 南昇平）

「進化論」をテーマに博士論文

体にとって勉強材料になると思いました。そこからいろんなベンチャーが生まれていきますね。

——そうした縁から、カラオケ産業を博士論文のテーマに選んだんですね

前川 会社を退職する前、

も理解してくれて毎晩、勉強時間は取れました。息子が万年筆を贈ってくれたのが特にうれしかった。今も愛用しています。

——国際経営論の講義では松下電器での経験が生かされていますか

前川 やはり、これは逃げられませんがね。企業で成功、失敗したことを基に論理的に



①

——「進化論」の後書きには、この本が「大学の教科書にもなる」と書かれています。実際のところは

前川 関西外大と高知工科大学大学院起業家コースで「カラオケ進化論」を教えています。カラオケは技術、産業面から見ると、濃縮されていて非常にいい勉強材料なんです。

関西外国語大教授 前川洋一郎さん

——執筆のきっかけは何ですか

前川 松下電器産業（現パナソニック）の録音機事業部で商品企画を担当し、家庭用カラオケ機の第1号を企画したことがあります。カラオケをサービスマンとしてみていくと、たった40年間でものすごく進化しているんです。イノベーションに次ぐイノベーションで。しかも歌というコンテンツから、（現場である）カラオケボックス、喫茶店まで、長いバリエーション（つながり）があるんですね。これは産業として、国民全

もう一度勉強したいと思い、こっそり社会人大学院に通い始めました。大学院には20代から60代までいろんな人がいて、非常に勉強になりました。刺激も強かったですよ。

——大学院の勉強というのは自分で深く研究しないといけません。しかし、そういう面は企業人にはなかなか身に付いていないですね。幸い、良い指導教官に恵まれました。

——ご家族の支えで続けられたと

前川 ちょうど息子が大学院に、娘が大学院の博士課程にそれぞれ入った時期で、家内

補強した内容を教えるのは、学生にとってもものすごく勉強になります。非常に興味をもって聴いてくれる。人生の先輩として恩返しの一つだと思っています。

——内部から見て、現代の大学はどう映りますか

前川 大学と大学院との役割分担が壊れているように思います。大学が高校や高専の延長線上みたいになってしまっている。大学院もレベルが落ちてきています。高校と大学、大学院、それから会社の役割分担をはっきり見直さないとけないですね。